

## 第8節 伝山村出土鏡の検討

ここでは、伝山村出土鏡について資料報告を行い、ベンショ塚古墳との関連性について検討する。

伝山村出土鏡の存在が周知されたのは、1968年に刊行された『奈良市史 考古編』である。ここでは、山村出土の鏡として伝わるもののが、五島美術館に2面あることが写真図版とともに紹介された。ただし、簡単な紹介があるので、写真についても不鮮明な部分があるため、改めて資料の観察・記録を行い、その所見を再報告する。

## 第1項 山村について

伝山村出土鏡についてふれる前に、山村の範囲をまとめておく。現在、奈良市に山村は存在せず旧地名である。1889年の町村制施行により添上郡窪之庄村、池田村、柴屋村、山村、田中村、今市村が合併し帶解村が成立する。その後、1927年に帶解町となり、1955年に奈良市に編入されて現在に至る。

1889年以前に存在した山村の範囲は、明治18(1885)年作成の地図によると図59の通りであり、西はベンショ塚古墳が所在するあたりから、東は円照寺墓山古墳群や五ツ塚古墳群が連なる谷部の広範囲に及ぶ。この谷の北斜面地を中心に多数の古墳が存在するため、山村出土という情報だけで出土地点を特定することは困難であることがわかる。それでも、本書で報告したベンショ塚古墳も「山村」に所在する古墳のうちのひとつであり、墳頂部は戦前に相当する時期およびそれ以前にも盗掘を受けた事実がある。よって、その関連性を以下で追求したい。

## 第2項 五島美術館所蔵伝山村出土鏡の報告

東京都世田谷区に所在する公益財団法人五島美術館には、伝山村出土鏡2面が所蔵されている。来歴は、弁護士で収集家の守屋孝蔵氏(1876-1954年)のコレクションの一部が、五島美術館の開館(1960年)に合わせて購入されたことによるようである。

### I. 三角縁吾作盤龍獸帶画像鏡 (図60.PL.35)

箱書 銅鏡は桐箱に収められており、蓋の外面右上に「大和国添上郡帶解村大字山村出土 盤龍神獸鏡」と墨書きされ、中央には「重要美術 銅製盤龍獸帶書象鏡」とある。所見 五島美術館でM092として管理されるもので面径21.7cmである。

鉢は半球形を呈し、鉢孔は長方形である。鉢座は列点文をめぐらした外側に向かい合う2対の盤龍座を施す。内区は6つの乳と神獸像からなる。乳はやや高まりをもつ乳座をもち、その外側を円圏で囲う。乳間にはデフォルメされた東王父・西王母が対置し、それ以外の部分には半肉彫りの獸像が配置される。界圏には断面が蒲鉾状を呈する銘文帯がめぐり、「吾作竟有文〔…不明瞭〕東王父西王母令長宜子孫兮」とある。外区は櫛齒文+鋸齒文+鋸齒文とめぐり、最も外側には外周突線が認められる。外区端部は三角縁となる。

外区の鋸齒文や三角縁の立ち上がり部分には研磨痕が観察できる。また、乳頂部などの高い部分は光沢を呈する。外区の鋸齒文部分には、赤色顔料が一部付着する。

銘文帯に近い位置の内区部分には打撃痕があり、そこを起点に外区側が大きく割れている。内区側にも主に3方向にヒビが入った状態である。打撃点は約3cm程度と

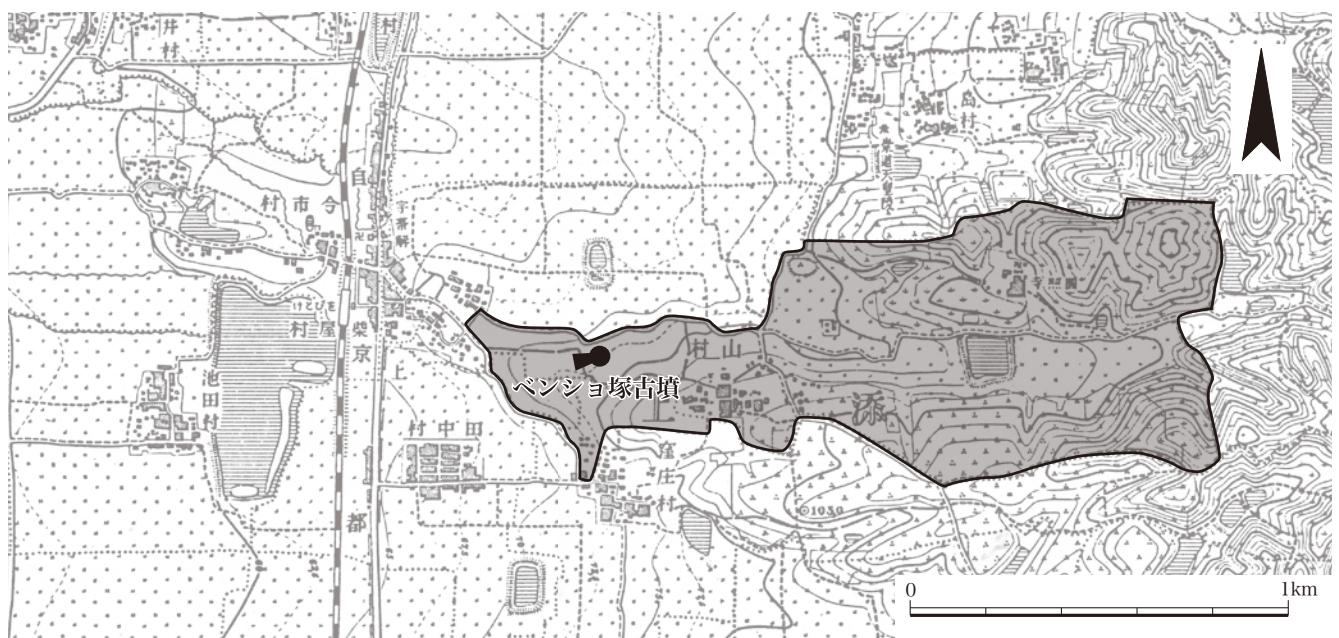


図59 山村の範囲 (1885年)

小さいが、外区側に向かって深くなる。このように割れやヒビのある鏡は、石室崩落に伴うものである場合が多いが、本鏡はそれにしては打撃点が小さく、また打撃点周辺に鉄錆がみられることから鉄器との接触により生じたものである可能性が高い。

評価 画像鏡の研究は銅鏡研究のなかでは低調であり、樋口隆康による分類と編年（樋口 1979）を基本とし、系列と製作年代にふみこんだ上野祥史の研究（上野

2001）が評価する上で参考となる。画像鏡は大きく写実式・デフォルメ式・同向式に分類することができる。本鏡は内区の神獣像がデフォルメされたものであるが、上野分類のデフォルメ神獣式は神獣像の表現をもとに A～D に分けられており、第三者により分類するのが困難である。ただし、補記されている内容をもとにすると、吾作銘であるものはデフォルメ神獣 C 式のみにみられることから、これに位置づけられる。縁部形態が上野分



図 60 三角縁吾作盤龍座画像鏡（五島美術館所蔵） 4 / 5

類の三角縁 B に相当することもこれを補足する。また、上野は銘文との関係から 7 つの系列を抽出しているが、デフォルメ神獸 C 式は劉氏系に分類され、中国での出土状況は黃河と淮河に挟まれた地域や樂浪郡に分布する。このことから、華北東部地域を製作地として推定しており、製作年代も概ね 170 年以降に位置づけている。

既往の理解をもとに評価したが、本鏡は獸像が半肉彫りであることや銘文帯が蒲鉾状を呈することなどが、斜縁鏡群と共に通する。デフォルメされた神像が仮に獸像であれば、画像鏡よりは上方作系浮彫式神獸鏡に近い特徴をもつものと評価できる。したがって、内区の主題はあくまで画像鏡を意識しているものの、斜縁鏡群のなかで画像鏡の要素を取り入れて製作されたものである可能性が高い。

## II. 六鈴乳脚文鏡（図 61.PL.36）

箱書 銅鏡は桐箱に収められており、蓋の外面右上に「大和国添上郡帶解村大字山村出土 銅製変形七乳文六鈴鏡 重要美術」と墨書きされ、中央には「重要美術 銅製変形七乳文六鈴鏡」とある。

所見 五島美術館で M194 として管理されるもので面径 11.0cm である。1・3・5・7・9・11 時の方向に 6 つの鈴が取り付けられた鏡で、内区は乳脚文を主文様とする。

鈕は半球形を呈し、鈕孔は長方形である。鈕の一部に范傷に伴うとみられる窪みがある。鈕座は円座であり、その外側が内区主文様帯となる。乳脚文は、乳の周りに脚状の細線が施されるものであるが、本鏡は乳の周りにΩ形の文様が施される。乳からは蕨手状の細線がのびる。乳脚文は 7 つあるがやや不均等に配置される。乳脚文間

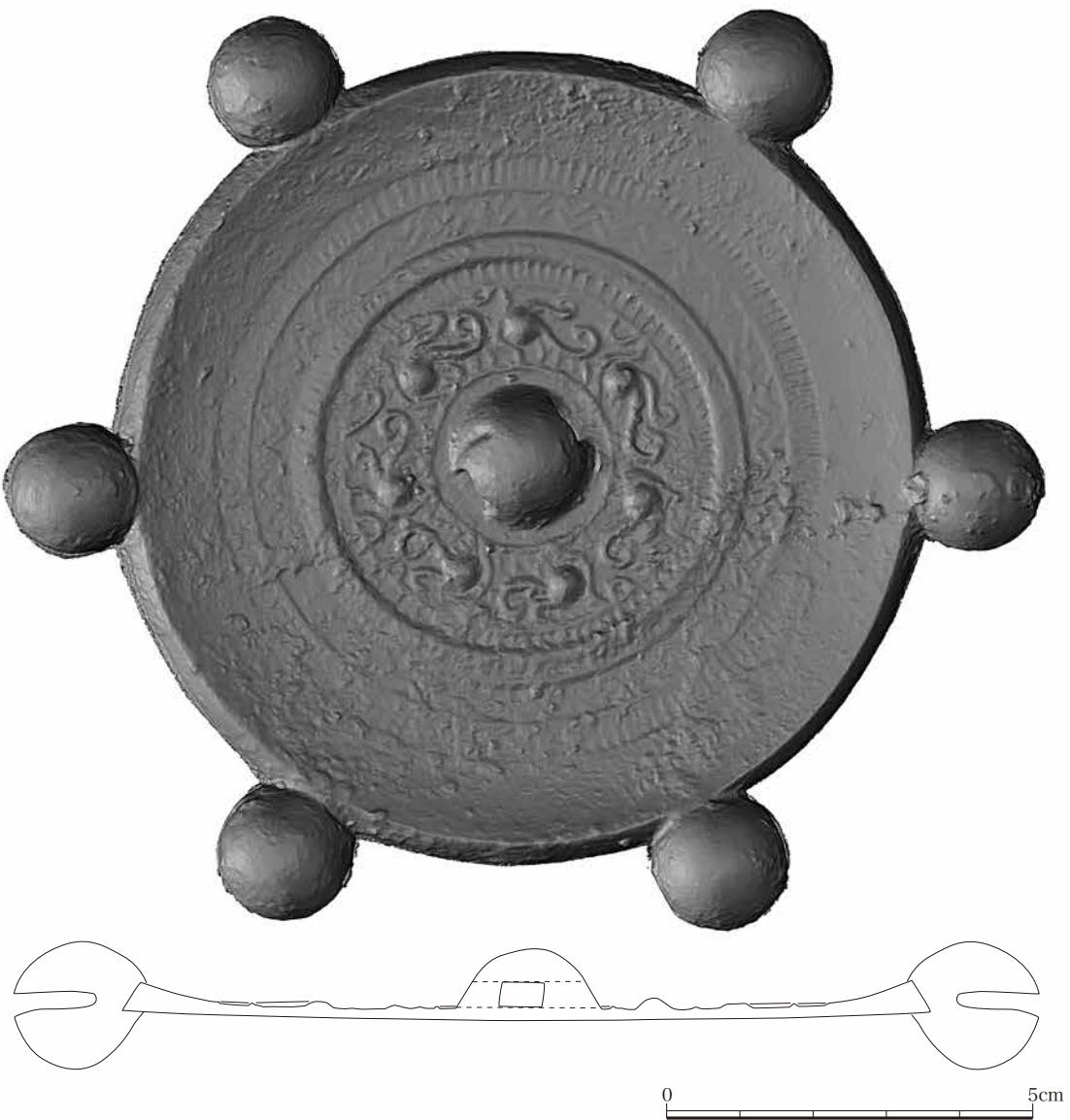


図 61 六鈴乳脚文鏡（五島美術館所蔵） 1 / 1

には唐草状の細線が埋められる。主文様帶の外側には櫛歯文が施され、段差をもってその外側にもう1重の櫛歯文がめぐる。外区はこの櫛歯文から外側へ複線波文+櫛歯文となり、やや斜縁状を呈する無文の外区周縁となる。鈴は外区縁部に溶接されており、外側に切れ込みがあり内部には不整形な金属粒が入っており音がなる。

**評価** 乳脚文鏡については、加藤一郎が網羅的な分析をもとにした評価を行なっている（加藤 2020）。これによれば、Ω形の乳脚をもつものは乳脚紋鏡 A 系に分類される。A 系はさらに a～e 式に細分され、主に乳脚紋の近接関係や外区紋様の構成、内外区の肥厚差をもとに分類することができる。本鏡は、乳脚紋鏡 A 系 c 式に位置づけることができ、同型式のものは本鏡を含めて 5 面確認される。なお、前段階までの a・b 式には鈴が取り付くものではなく、c 型式のものから鈴鏡であるものが出現する。

加藤は出土古墳の築造時期を製作年代の下限とみる方法で編年を行なっており、乳脚紋鏡 A 系 c 式については良好な編年資料に乏しいものの、前段階の乳脚紋鏡 A 系 b 式を TK208 型式期に置くことができ、後段階の乳脚紋鏡 A 系 d 式がいずれも TK47 型式期に位置づけられることから、概ね TK23 型式期を中心とする時期を想定することができる。

### 第3項 考察

#### I. 箱書にみる出土時期の推定

2面はいずれも同様の桐箱・箱書（図 62）をもつこ

とから、同じルートで守屋の手に渡った可能性が高い。また、画像鏡に残る痕跡から盗掘品であると考えられる。

箱書で注目すべきは、大和国添上郡「帶解村」とある点である。前述のように、帶解村は 1889～1927 年に存在したことから、この間に盗掘され流出した可能性が高い。なお、4 面の銅鏡が出土した円照寺墓山 1 号墳が不時発見されたのは 1927 年 4 月のことであり、ちょうど帶解村から帶解町へ変わった年でもある。ただし、仮にこの不時発見時の盗品<sup>(1)</sup>であるならば、市場に出回るのはそれ以降であり、「帶解町」出土と箱書されるはずである。実際、1930 年に刊行された円照寺墓山 1 号墳の報告でも、「添上郡帶解町山村」と表記され、東京国立博物館の登録上も「奈良市帶解町大字山林」となっている。

のことから、五島美術館所蔵鏡は 1889～1927 年の間に盗掘されたものである可能性が高く、また円照寺墓山 1 号墳に関わる可能性は低いと考える。

#### II. 2面が共伴する可能性について

五島美術館所蔵鏡は、いずれも帶解村大字山村出土とされるものであり、同一古墳から出土したものか否かも不明である。したがって、まず日本列島で共伴する可能性がありうるのかを検討する。

画像鏡出土古墳は表 5 の通りであるが、基本的に前期古墳での出土が多数で、中期古墳からの出土は大分県鑑堂古墳、静岡県堂山古墳のみである。共伴鏡のある堂山古墳は八弧内行花文鏡と上方作系浮彫式獸帶鏡が伴う状



図 62 銅鏡が収められた桐箱と箱書（五島美術館所蔵）

況である。

画像鏡の製作年代は前述の通り2世紀～3世紀前半であり、日本列島で前期古墳からの出土が大半である点からみると、概ね3世紀前半～4世紀にかけて舶載したものが副葬されたと考えられる。わずかにみられる中期古墳出土鏡は長期保有されたものと考えられるが、それでも5世紀後半まで下る事例は認められない。

六鈴乳脚文鏡は、5世紀後半以降に出現するものであり、日本列島で両者が共伴する事例がないことはもちろん、その可能性も極めて低いことがわかる。したがって、基本的には同じ埋葬施設に共伴して出土することはない鏡であると考えてよかろう。

### III. 三角縁吾作盤龍獸帶画像鏡出土古墳の検討

日本列島で出土した画像鏡は表5の通りであり、他の舶載鏡に比べると数は少ない。また、そのうち大多数は前期古墳から出土したものであり、中期古墳出土事例はわずかである。

山村を中心とする帶解地域には、確実に前期に遡る古墳は確認されていない。栗塚古墳にその可能性が残るもの、墳頂部に荒らされた痕跡はなく未盗掘である可能性が高い（ト部 1996）。このことから、山村周辺で前期古墳からの出土地を求めるることは難しい。

そこで、興味深い事例として山村に所在する円照寺墓山1号墳がある（佐野・末永 1930、奈良市 1968）。ここでは埋葬施設が3つあったとされ、出土遺物の共伴関係に不明確な点があるものの、三角板銅留短甲・襟付三角板革綴短甲等と三角縁神獸鏡が出土しており、三角縁神獸鏡の伝世事例としてよく取り上げられる（田中

1983、森下 1998）。つまり、山村出土鏡として画像鏡が伝来していることは、円照寺墓山1号墳のほかにも長期保有鏡を所有しうる古墳があった可能性を示し、山村一帯にはそういった特徴が備わりうる性格があつたことを物語る。

ただし先にも述べたように、本鏡は円照寺墓山1号墳発見時の盗品とは考え難く、そもそも基底部に埋葬施設をもつ円照寺墓山1・2号墳の性格を考えると、付近に同時期の古墳があつたとしても、一般的な盗掘で埋葬施設に到達する可能性は極めて低い。

しかし、この一帯には圓照寺宮墓があり、圓照寺墓山1号墳もこの修理に伴う土砂採取で偶然みつかったものであるという経緯がある。また図63・PL37に示す圓照寺所蔵<sup>(2)</sup>の三角縁四神四獸鏡（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1971、奈良県立橿原考古学研究所 2005）は、圓照寺裏山古墳出土として伝わるもので、鏡が出土するような古墳が他にもあつた可能性を示す。よって、圓照寺関連の開発に伴い不時発見されるような場面は想定できるが、圓照寺から骨董市場へ流れることは門跡寺院という性格、および圓照寺所蔵鏡があることも含めて考え難い。

圓照寺周辺でなければ、山村で盗掘履歴の判明している古墳はベンショ塚古墳のみである。また、明治～戦前ごろに一帯で知られていた中期古墳はベンショ塚古墳、圓照寺墓山古墳群、柴屋丸山古墳、シズカ塚古墳程度であり、柴屋丸山古墳も基底部に埋葬施設のある古墳であつたため、ベンショ塚古墳がその出土地である可能性は高い。ベンショ塚古墳で鏡片は出土していないが、山村と長期保有鏡の関連性を考えれば、周辺で最も古く、

表5 日本列島における画像鏡出土古墳

所在地	古墳名	鏡名	共伴	時期	型式	上野分類 系列	製作年代
福岡	潜塚	田氏作神人龍虎画像鏡		前期	デ神 C	劉氏系	170～
大分	鑑堂	劉氏作神人龍虎車馬画像鏡		中期	デ神 B	龍氏系	100～
山口	竹島	劉氏作神人龍虎車馬画像鏡	三角縁正始元年神獸鏡等 3	前期	デ神 B	龍氏系	100～
島根	寺床 1号	神人龍虎画像鏡		前期	デ神 D	三羊系	170～
愛媛	相の谷 1号	斜縁禽獸画像鏡	四獸鏡	前期	デ神 D	三羊系	170～
兵庫	西求女塚	田氏作神人龍虎画像鏡	三角縁神獸鏡 7、画文帶神獸鏡 2、上方作系浮彫式獸帶鏡、獸帶鏡 2	前期	円 II	袁氏系	150～170
奈良	大和天神山	神人龍虎画像鏡	方格規矩鏡 6、内行花文鏡 4、斜縁神獸鏡 3、画文帶神獸鏡 3、四獸鏡 3、人物鳥獸文鏡、上方作系浮彫式獸帶鏡	前期	円 III	袁氏系	170～
奈良	黒石	神人龍虎画像鏡	五獸鏡	前期	円 I	袁氏系	100～150
奈良	黒石	袁氏作神人龍虎画像鏡	五獸鏡	前期	円 III	袁氏系	170～
奈良	伝山村	吾作盤龍座獸帶画像鏡			デ神 C	劉氏系	170～
京都	岩滝丸山古墳	田生作神人車馬画像鏡		前期	広 II	吳郡系	150～190
福井	風巻神山 4号	神人龍虎画像鏡		前期	デ神 C	劉氏系	170～
静岡	堂山	田氏作神人龍虎画像鏡	八弧内行花文鏡、上方作系浮彫式獸帶鏡	中期	デ神 C	劉氏系	170～
群馬	三本木	袁氏作神人龍虎画像鏡	三角縁神獸鏡 3、八神像鏡（倭）	前期	円 I	袁氏系	100～150

なおかつ前方後円墳であるベンショ塚古墳に長期保有された画像鏡が副葬された可能性は十分考えられる。

#### IV. 六鈴乳脚文鏡出土古墳の検討

乳脚文鏡は、加藤一郎が集成しているように中～後期古墳での出土がみられる。なかでも、本鏡は加藤分類の乳脚文鏡 A 系 c 式に位置づけられる鈴鏡でもあり、概ね TK23 型式期以降の古墳に伴うことを確認した。

山村を中心とする帶解地域で TK23 型式期の古墳は今

のところ確認されていない。先にあげた円照寺墓山 1 号墳は概ね大賀編年中 IV 期 (TK208 型式期) とされており (大賀 2002)、円照寺墓山 3 号墳は横穴式石室をもつ後期古墳であることなどから、円照寺墓山古墳群のなかに TK23 型式期の古墳が含まれる可能性はある。圓照寺関連の開発に伴い不時発見された鏡である可能性はあるが、先の検討からも考え難い。

一方、ベンショ塚古墳についてみると、築造時期は出土埴輪から埴輪編年 IV-1 期、第 2 埋葬施設は副葬品か



図 63 圓照寺所蔵三角縁四神四獸鏡 4 / 5

ら大賀編年中III期(TK216型式期)に相当する。したがって現状では、第1・2埋葬施設は盗掘を受けているものの、本鏡の出現以前にあたるため候補とはなり得ない。第3埋葬施設は玉類のみの出土であり、第2埋葬施設が中III期と考えると、埋葬施設の主軸方向も異なる第3埋葬施設は中III～IV期に置くのが穩当であろう。

しかし、第1・3埋葬施設付近に重複する搅乱から出土したガラス丸玉3点は、分析の結果コバルトで着色された植物灰タイプのソーダガラス(Group SIIIB)であることがわかり、TK208型式期に列島では出現し、研磨のあるものはTK47型式期以降に増加するようである(第5章第1節等参照)。第3埋葬施設の年代は定め難いものの、TK47型式期まで下らせることは困難である。それでもこのガラス丸玉が出土しているということは、現状みつかっているなかでは最も新しい第3埋葬施設の時期が下るか、第4の埋葬施設が存在する可能性が考えられる。いずれにしても、このガラス丸玉が副葬される時期は本鏡が共伴してもおかしくないため、候補のひとつとなり得る。周辺では5世紀の前方後円墳がベンショ塚古墳のみであり、次に前方後円墳がみられるのはMT15～TK10型式期の中之庄上ノ山古墳である。したがって、ベンショ塚古墳に複数ある埋葬施設の存在から埋葬継続期間を長く見積もることは考慮すべきであり、本鏡との関連性を排除することはできない。

#### 第4項 まとめ

以上の通り、五島美術館に所蔵される伝山村出土鏡2面の再報告を行い、その所見と評価を述べた。とくに画像鏡は斜縁鏡群とも関連のある属性をもち、銅鏡生産を考える上でも重要なものであることを明らかにした。

出土地の検討では、圓照寺関連の開発に伴い不時発見された可能性のある三角縁神獸鏡の存在を示したが、門跡寺院である性格を含めて市場へ流れる可能性は低いことを述べた。五島美術館の登録台帳には、備考欄に画像鏡は円照寺裏山出土?、乳脚文鏡には円照寺近く?と記載があるが、箱書には圓照寺に関わる記載はない。おそらく、奈良市史編纂時に五島美術館へ照会した際、当時銅鏡の出土が知られていた円照寺墓山1号墳や圓照寺所蔵鏡が円照寺裏山古墳出土として伝わることから、伝聞したものが反映されたと考える。よって、五島美術館所蔵鏡を圓照寺に関連させる根拠はなく、むしろ同じく山村に所在するベンショ塚古墳で出土した可能性が高いことを示した。とくに、ベンショ塚古墳は5世紀前半の古墳と評価されてきたが、第3埋葬施設はそれよりやや下

り、さらにも出土したガラス丸玉は5世紀後半以降に認められるものであるため、六鈴乳脚文鏡が副葬され得る可能性を排除しきれなくなつた。むしろ、おそらく同一年代・時期に同様の山村出土とされた鏡が購入された背景からみて、同じ古墳、または古墳群から出土したもののが一括で流れたと考えると妥当性は高まる。

また、三角縁吾作盤龍座画像鏡は2世紀後半～3世紀前半頃に製作された舶載鏡であり、上記のいずれの可能性をとっても長期保有鏡である可能性が高いことを明らかにした。このことは、円照寺墓山1号墳出土鏡を中心に、圓照寺所蔵三角縁神獸鏡もあわせて、山村付近一帯が長期保有鏡を副葬しうるまとまった性格のあることを示すものとしても重要である。

一見、3世紀に製作された舶載鏡である画像鏡と、5世紀後半に列島で製作された六鈴乳脚文鏡がひとつの古墳で出土するとは考えられないが、長期保有鏡がまとまって認められる帶解地域の特質、埋葬継続期間を長く見積もることができそうなベンショ塚古墳の性格を考慮すると成り立つ可能性があると考える。

(村瀬)

謝辞 本稿に係る資料調査では、公益財団法人五島美術館(砂澤祐子氏、林克彦氏、菅沢そわか氏)、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館(青柳泰介氏、平井洋史氏)に大変お世話になりました。また、調査にあたり圓照寺、岩本崇氏には格別のご高配・ご教示を賜りました。記してお礼申し上げます。

#### 註

- (1) 不時発見後に調査へ出向いた際にはかなり荒らされていたようで、その時に一部が散逸した可能性はある。
  - (2) 保管は橿原考古学研究所附属博物館である。
- ※図60・61・63は筆者が計測したSFMによる三次元モデルとその断面図

#### 引用文献

- 上野祥史 2001「画像鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』86-2 日本考古学会  
ト部行弘 1996「栗塚古墳・割塚古墳測量調査報告」『研究紀要』3 由良大  
和古代文化研究協会  
大賀克彦 2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』福井県清水町  
教育委員会  
加藤一郎 2020『古墳時代後期倭鏡考 雄略朝から繼体朝の鏡生産』六一書房  
佐野小吉・末永雅雄 1930「圓照寺墓山第1号古墳調査」『奈良県史蹟名勝  
天然記念物調査報告』1 奈良県  
田中晋作 1983「埋納遺物からみた古墳被葬者の性格-三角縁神獸鏡・石製  
腕飾類・甲冑の分析-」『関西大学考古学研究室開設三周年記念考古学  
論叢』関西大学文学部考古学研究室  
奈良県立橿原考古学研究所 2005『三次元デジタル・アーカイブを活用した  
古鏡の総合的研究』  
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1971『大和考古資料目録1』  
奈良市 1968『奈良市史 考古編』  
樋口隆康 1979『古鏡』新潮社  
森下章司 1998「鏡の伝世」『史林』81-4 史学研究会